芝櫻

芝櫻

上巻

有吉佐和子

新潮社

芝櫻（しばざくら）　上巻

昭和四十五年八月二十五日印刷
昭和四十五年八月　三十　日発行

定価六〇〇円

著　者　有吉佐和子（ありよしさわこ）

発行者　佐藤亮一

発行所　新潮社
東京都新宿区矢来町七十一　郵便番号　一六二
電話東京〇三（260）二二一（大代）振替東京八〇八

印刷　株式会社金羊社
製本　新宿加藤製本所

© Sawako Ariyoshi 1970 Tokyo
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

芝櫻　上巻・目次

第一章　芝桜

第二章　まだら猫

题字　町春草

装画　原万千子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

芝櫻

上卷

第一章　芝　桜

一

跼んだ膝の上に足袋の袋をのせて、正子は真剣な顔で右手に小さな手網を持ち、左手で小さな金盥を摑まえながら、泳いでいる金魚に狙いをつけた。晩春とはいっても、まだ水は冷たい。だが踊りの稽古の帰り道だったから、正子の躰は火照っていて、だから金魚を掬うにも踊りのときの闘志が残っている。縁日の賑わいの中で、金魚屋はまだちょっと季節が早いせいかこの店が一つあるだけで、四角い生け簀の中で泳いでいる金魚も豪勢なものは少なかった。黒い小さな魚が多いのである。黒の出目金はまるで醜女のようだ。斑の出目金も混じっていた。だが正子は、そういう屑のような金魚には目もくれずに、数は少ないがその大きさと鮮やかな緋の色で、水の中では一際目に立つ大物に狙いをすえていた。

手に持った手網は、針金で作った輪に薄い和紙を張ったものである。輪の直径は二寸もなくて、正子が追う金魚の身長より小さい。だから正子が獲物を掬い上げると、たちまち金魚は身悶えして濡れた薄紙を破って水の中に逃げてしまった。正子は形のいい小さな唇を噛むと、小銭入れから五銭玉を金魚屋に渡して、また新しい手網を三本買い、美しい眼で赤い金魚を追いまわした。

正子は決して不器用な娘ではない。踊りだって、清元だって、師匠が将来有望だと本気で期待しているほど勘がいいのである。だが何分にも狙いをつける金魚が大きすぎた。それはほんの数

四、金魚屋が見た目の景気づけに入れてある金魚だった。縁日に群がって来る子供たちでさえ、この網であの金魚は無理だと判断して決して追いかけない。それを正子は意地のように掬い続けて、どの網もたちまち破いてしまい、またたくうちに一円も使い果してから、ようやく諦めたのか、その割にはあまり口惜しそうな顔もせずに立上った。

「よすの？　正ちゃんは、まあもったいない」

それまで手も出さずに黙って見ていた蔦代が、そう言いながらするりと正子と居所替りをして、正子が投げ捨てるように脇へ積んでいた破れた網を手にとると、破れ残っている紙の端を水に浸し、ひょいひょいひょいっと小器用に小柄な金魚を掬っては金盥の水の中に投げ入れた。

金魚屋はそれを見ても咎めなかった。何しろ正子がまるで無駄に大金を払った後なのである。白米が一升五十銭になって全国的な米騒動が起っている時代である。こんな気前のいいお客はどこの縁日でも滅多にあるものではなかった。首に古手拭を巻きつけた彼は、黙って水槽の隅で腹を上にして死んだ金魚を掬い出しては足許に捨てていた。水の冷たさと非情な客の手で追いまわされて、何匹かの金魚は疲れて死ぬ。

蔦代は素早くその様子を見てとると、手網を置いて金魚屋に声をかけた。

「小父さん、その金魚はどうするの？」

「どうするって、御縁日に、このままここへ捨ててもおけねえ。あとで始末しまさあ」

「それ、頂戴」

「え？」

「可哀そうだもん、私がお供養するわ。何かに包んで頂戴よ。そのかわり、この掬った分はいらないから」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

蔦代の左手が掴んでいる小さな金盥の中で、小さな不器量ものの金魚が五匹泳いでいた。金魚屋の足許には六匹の死骸が土の上に惨めに打ち重なっている。金魚屋は桃割れに結った美少女の思いがけない申入れに驚いて、しばらく戸惑っていたが、やがて蔦代の一重瞼の下から輝く黒い鋭い目に抗えなくなったように、古新聞の切れ端で死んだ金魚をくるむと、

「すまないねえ。だけど若いのに感心だねえ。へい、毎度ありィ」

と言いながら蔦代に手渡した。若い娘といっても二人とも濃く衿白粉を塗っていたし、金遣いの荒さからも素人家の娘たちとは彼も思わなかっただろう。

正子はもう先に金魚屋を離れて歩き出していたが、人混みの中で蔦代が追いつくと小さく眉をひそめて、

「やだわ、そんなものをお蔦ちゃん、どうする気なの？」

と訊いた。

お供養だ、可哀そうだと言えば、心の優しい感心な子だと思われるのはきまっているけれども、現実には死んだ金魚など、始末に困るものとしか思えない。

「うん、お墓を作ったげようと思ってね。金魚のお墓をさ」

「どこへ」

「津川家の前庭に」

「お姐さんに叱られないかしら」

「だってお供養だもの、叱られないわよ」

「そうかしら」

「そうだわよ。怒ったとしても、作ったお墓を掘り返せとは言わないわ」

そう言えばその通りかもしれない、と正子は少し感心した。津川家へ入ったばかりの頃、お姐さんが正子に耳打ちをして、「蔦代には気をおつけ」と言ったのを思い出す。こういう具合に先廻りして考える性質では、目上の者から見れば小面憎いのかもしれない。

「正ちゃん、ちょっと待ってよ」

縁日の賑わいの外れに植木屋が並んでいた。綺麗に花をつけた木瓜の盆栽などを売っている。桜は終ったばかりだが、他の花々は季節を迎えているので、この一画は正子などには珍しいものが咲き群れていた。今日のために苦心して花を保たせたり急がせたりしたのであろうか。木瓜から躑躅まで、晩春から夏にかけての花が一度に開いている。金魚屋ではあまり気のない顔で正子の掬うのを眺めていた蔦代が、ここでは眼を輝かせて、一鉢一鉢を丹念に見てまわった。ちょっと目馴れないものの前にくると、

「小父さん、これ、なんての？　ふうん、何をやって育てるの？　やっぱり油粕ね。この鉢は、おいくら？　こっちは？」

植木や花の名を訊き、施肥の方法から値段まで一々訊いてまわる。

正子はだんだんいらいらしてきた。蔦代はどの花も念入りに眺めまわし、細かいことを売手に問い糺しながら、一向に買う気配がないのだ。正子は生れついて商人をひやかすということのできないタチで、縁日に店を張る以上は売るのが目的で、何を買う気もないのがいつまでうろうろしているのは相手に迷惑ではないかと思ってしまう。

「お蔦ちゃん、もう帰りましょうよ」

「うん。でも、ちょっと待って」

「買う気もないんでしょう？　あんまり道草を喰うと、お姐さんに叱られるわよ」

「大丈夫よ、小勘お師匠さんとこでうんと絞られてたって言えば」
「私、先に帰るわ」
「まあ待ってよ。ちょっと御覧な、月が替っただけで花の数が先月の倍できかないんだから。見ているだけで楽しいじゃないの」
　蔦代は一重瞼の美しい眼を細めて、うっとりと小さな花々に見惚れているのだった。その横顔を見ていて、正子は急きたてたことを少々後悔した。津川家のお姐さんはああ言ったけれど、蔦代が花を眺めて放心している様子には外連みなどはないのだ。こんなに花が好きな蔦代が、気を許さずに交際うべき相手とは思えない。お蔦ちゃんは、きっといい人に違いない。ただ少々知恵が先走るだけなんだわ、と正子は考えていた。
　連翹の花の前で、しばらく蔦代は立止っていて、正子を顧みると、
「ねえ、どうォ。一つだって花が凋れていないのよ。こんなに根元から枝先まで、びっしり花をつけて一度に咲かせるなんて、大層な丹精だわよ。見事だわねえ」
　と言った。
　そう言われて見れば、なるほど目の前の植木鉢には、黄金色の塔が立ったように連翹が一杯に花を開いていた。草木にはあまり興味のない正子でさえ一瞬これは買って帰ろうかと思ったほどである。
「おじさん、これ、いくら？　まあ一円五十銭、これが？　安いわねえ」
　あれだけ手放しで褒めて感嘆していたのだから、それに安いと言っているのだから、今度こそ買うかと思ったのに、蔦代は値段を訊くとすぐ連翹の前を離れて、隣の店の黄素馨の前で蹋んでしまった。左手に足袋の袋を提げ、右手には死んだ金魚をくるんだものを後生大事に捧げている。

正子はまたじりじりしてきた。正子は性急なのである。今日はお約束があるのだから、早く帰って髪を撫でつけたり、化粧をしたり、着替えたり、しなければならないのだ。正子は雛妓と呼ばれて津川家でもまだ一人前の扱いは受けていない身分だけれども、身だしなみにはじっくり時間と手間をかけなくてはいい芸者になれないことをもうわきまえていた。蔦代のこんな調子につきあっていたら、帰ってから支度に随分慌てなければならなくなる。

「お蔦ちゃん、やっぱり私は先に帰るわね」

言い切ったつもりだったが、蔦代は顔を上げると、

「まあ待ってよ、どれを買おうかって迷ってるんだから、急かせないで頂戴よ。下手して買いそこなったら恨むわよ、正ちゃん」

と、からみつくように言うのだ。

そう言われれば急かせては悪いようでもあり、津川家では蔦代は正子より年も上だし先輩なのである。買う気はあると言うのだし、買いそこなったら恨むとまで言われては、切り花でなくて春の終りに根のあるものを買うのだから、確かに後々まで恨まれるだろう。正子は口を噤んだ。それにしても、たかが植木を買うぐらいのことで、後で恨むわよとは凄いことを言う。正子は少少鼻白んだ。が、こうなっては待たないわけにはいかない。

蔦代はそれからまた立ったり、鉢の前に蹲んだりしながら時間をかけ、それから一番先の植木屋に戻り、隅っこの箱の中につくねてある小さな草花を指した。

「おじさん、その芝桜は、いくらだっけ」

「一株、五銭だよ」

「そう、じゃそれ、三つ頂戴な」

「三つ、白かね、桃色かね」
「鴇色のがいいわ。あ、それじゃなくて、端っこの、そう可哀そうになってるの頂戴よ、それ三つ」
「これなら三つ十銭にまけとくよ」
「ありがと。油粕をやればいいのね」
「ああ、油粕は一袋三銭だよ」
濃い桃色の花が、端の方で凋れているのを三かたまり植木屋は節だった手の先で古新聞に包んで蔦代に渡した。蔦代は急いで足袋入れを脇の下に挾んで左手で芝桜を抱きかかえ、右手には死んだ金魚の包みを持って両手のふさがったところで正子を振返り、
「正ちゃん、ちょっと十銭貸しといて」
と気軽く言った。
ようやく帰れると思うと正子は心急いて、言われるままに小さなガマロから十銭玉をつまみ出して植木屋に渡した。そのまに蔦代はすいすいと先に歩き出した。足袋入れに芝桜に死んだ金魚と妙なものばかり持っているのに、蔦代はばかに姿勢がいい。芸者になるために少女がまず最初に仕込まれるのはいつもピンとどこかに錐を刺し込んだようないい姿勢を保っていることであった。正子は小柄なので胸を張っても人の倍も力まなければならなかったが、蔦代はかなり上背のある方なので、そうして歩くところを見ると、まだ雛妓とは思えないほど大人びて見える。正子は少しばかり見惚れて、それから急いで後を追った。
連翹の一円五十銭を安いと言った後で、買ったのは十銭の芝桜かと思うと、なんだかおかしかった。それもほんの三つか四つ凋れかかった侘しい花がついているだけのものである。びっしり花のついた連翹を見たあとだけに、その対照が奇妙だった。私だったら頼まれたって買わない花

だ、と正子は思った。掬えないと分っていても大きい金魚を追うのが正子の方は趣味なのである。

正子と蔦代の帰る津川家は、土地では抱えを十五人も持った大所の芸者屋であった。裏口まで来ると蔦代が立止って、

「正ちゃん、足袋入れだけ持って上ってくれない？」

「今から花を植えるの？」

「うん、手の汚れついでだから」

脇に挟んだ足袋入れを正子に取らせると、踵を返して表玄関の方へまわって行ってしまった。

「ただいま帰りました」

お姐さんの部屋の前で、よく拭きこんである廊下に坐って手をつくと、開け放した部屋の中で都新聞を拡げて読める字だけひろい読みしていた阿や八姐さんが振返り、

「おかえり、蔦代は一緒じゃなかったのかい？」

と訊いた。

「一緒に帰りました」

「どこにいるのさ、いないじゃないの。ちょっとでも眼の離せない子だねえ」

阿や八姐さんが蔦代を心許せないと思って色をつけて見るのはよくないことだと正子は判断したから、ついかばいだてしたくなっていた。

「違います。花を植えているんです」

「花を？」

阿や八が訊き返した。眼尻が切れていて昔はどんなに美しかったろうかと溜息が出そうになるような顔をしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.